論　文

山口方言における特殊拍とアクセントの関係

The Relation between Special Mora and Accent Nucleus in Yamaguchi Dialect

池田　史子
IKEDA Fumiko

1．はじめに

ＪＲ山口線の普通列車が，新山口駅を出発すると同時に，車内放送が行われる。

「９時36分発，山口行き普通列車です。これから，周防下郷，上郷，仁保津，大歳，矢原，湯田温泉と停まって参ります。宮野，益田方面へお越しの方は，終点山口にて10時４分発，益田行きにお乗り換えです。」

その日の車内放送担当の車掌さんにより，幾分かの違いはあるが，山口市周辺出身の車掌さんであれば大体次のようなアクセントで発音される。[1)]

「これから，周防下郷（ＬＨＨ.ＬＨＬＬ），上郷（ＬＨＬＬ），仁保津（ＬＨＨ），大歳（ＬＨＬＬ），矢原（ＬＨＨ），湯田温泉（ＬＨＨＨＬＬ）と停まって参ります。宮野（ＬＨＨ），益田（ＬＨＨ）方面へお越しの方は，終点（ＬＨＬＬ）山口（ＨＬＬＬ）にて，10時（ＬＨＬ）４分（ＬＨＬＬ）発，益田行きにお乗り換えです。」[2)]

ここで採り上げるのは，特徴的な地名のアクセントとして有名な山口（ＨＬＬＬ）ではなく，いわゆる特殊拍（ここでは，撥音・長音）にアクセント核が来ている場合の用例である。山口市周辺の若年層のアクセントと比較してみると次のようになる。

	車掌さんＡのアクセント	車掌さんＢのアクセント	山口若年層のアクセント[3)]
大歳	オートシ	オートシ	オートシ
湯田温泉	ユダオンセン	ユダオンセン	ユダオンセン
終点	シューテン	シューテン	シューテン
１０時	ジュージ	ジュージ	ジュージ
４分	ヨンプン	ヨンプン	ヨンプン

東京方言等のシラビーム性モーラ方言の場合は，特殊拍（撥音・促音・長音）や二重母音の副母音にアクセント核が来る場合，特殊拍や二重母音の副母音は独立性がとぼしくアクセント核を担いにくいので，そのひとつ前の拍へアクセント核がずれるという傾向がある。それに対して，山口方言は特殊拍もアクセント核を担うことができる方言であるという報告が今までにもあった。[4)]

では，この車内放送に登場する語彙のアクセントのうち，特殊拍にアクセント核が来る語彙について注目してみよう。車掌さんＡの上記５単語は，長音単独（大歳，終点，10時）に，あるいは撥音を含む高音部（湯田温泉），撥音単独（４分）の拍にアクセント核が来ている。

同年生まれではあるが，車掌さんＢでは，「湯田温泉，終点，10時，４分」の４語でアクセント核が前へ１モーラ分ずれている。しかし,「大歳」では依然,長音にアクセント核が位置したままである。

参考までに，山口市周辺の20歳前後の若年層のアクセントと比較してみると，若年層では，「大歳，湯田温泉，10時，４分」でアクセント核が１モーラ分前へずれており，「終点」は共通語（東京方言）と同じように平板化していることが分かる。結果として，若年層のアクセント型では，東京方言等のシラビーム性モーラ方言と同様に，特殊拍にアクセント核が来ることはなくなっている。ただし，日

常生活に登場することが少ない語彙であるとは言え，仮に東京方言の話者が「大歳」を発音するとすればオートシというアクセントになるので，若年層のすべてのアクセント型が東京方言と全く同じになっているわけではない。

はじめに，ＪＲ山口線の車内放送に反映された山口方言における特殊拍とアクセントの関係を簡単に考察してみたが，他の山口県内での調査結果も含めてこのことを考えてみることにする。

２．特殊拍とアクセントの関係

今回のアクセント臨地調査は，2007年3月に山口県長門市油谷と長門市通において老年層を対象として，2007年12月に山口市周辺において若年層を対象として行った。[5] 調査地点の位置は図１のとおりである。

以下では，特殊拍や二重母音の副母音がアクセント核を持つ語について観察し，それを若年層のアクセント型や，アクセント辞典による東京方言のアクセント型と比較する。

図１．調査地点

２－１．撥音にアクセント核が来る用例

先ず，撥音から成る拍にアクセント核が来ている用例から見ていくことにする。次のような例が観察された。その年代で主に発話されるアクセント型を示し，少数の例外を（カッコ）に入れて示した。

	山口老年層のアクセント	山口若年層のアクセント	東京方言のアクセント
一番乗り	イチバンノリ （イチバンノリ）	イチバンノリ	イチバンノリ
観覧券	カンランケン （カンランケン）	カンランケン	カンランケン
古今集	コキンシュー	コキンシュー	コキンシュー
３年生	サンネンセー （サンネンセー）	サンネンセー	サンネンセー
新聞社	シンブンシャ （シンブンシャ）	シンブンシャ	シンブンシャ
自転車	ジテンシャ	ジテンシャ	旧ジテンシャ（新ジテンシャ）

	（ジテンシャ）		
優先席	ユーセンセキ	ユーセンセキ	ユーセンセキ

本来，東京方言においては，乗車券ジョーシャケン・割引券ワリビキケンのように，「～券」で終わる語彙は，「～券」の直前の，後ろから３拍目にアクセント核が来る。その規則を適用すると，「観覧券」も同様にカンランケンとなるはずであった。しかし東京方言では，本来アクセント核が来ると予測される後ろから３拍目が撥音であったために，独立性がとぼしい特殊拍がアクセント核を担いきれず，アクセント核が１モーラ分前へずれるという現象がおこる。

しかし，山口方言の老年層では，撥音もアクセント核を担いうるので，「～券」の直前にアクセント核が来たままである。ただし，若年層では優先席ユーセンセキを除いて，東京方言と同様にアクセント核が１モーラ分前へずれている。その他の語彙も同じように説明できる。

若年層の自転車ジテンシャは，東京方言の新しいアクセント型と同じになっている。

２－２．長音にアクセント核が来る用例

次の用例は，長音から成る拍にアクセント核が来る場合である。次のような例が観察された。その年代で主に発話されるアクセント型を示し，少数の例外を（カッコ）に入れて示した。

	山口老年層のアクセント	山口若年層のアクセント	東京方言のアクセント
交通費	コーツーヒ	コーツーヒ	コーツーヒ
	（コーツーヒ）		
紅茶	コーチャ	コーチャ	コーチャ
五十代	ゴジューダイ	ゴジューダイ	ゴジューダイ
指定席	シテーセキ	シテーセキ	シテーセキ
自由席	ジユーセキ	ジユーセキ	ジユーセキ
卒業式	ソツギョーシキ	ソツギョーシキ	ソツギョーシキ
何十円	ナンジューエン	ナンジューエン	ナンジューエン
二重丸	ニジューマル	ニジューマル	ニジューマル
	（ニジューマル）		
日曜日	ニチヨービ	ニチヨービ	ニチヨービ
	（ニチヨービ）		
入場券	ニュージョーケン	ニュージョーケン	ニュージョーケン
	（ニュージョーケン）		
飛行機	ヒコーキ	ヒコーキ	ヒコーキ
	（ヒコーキ）		
傍聴席	ボーチョーセキ	ボーチョーセキ	ボーチョーセキ

東京方言においては，被告席ヒコクセキ･予約席ヨヤクセキのように，「～席」で終わる語彙は，「～席」の直前の，後ろから３拍目にアクセント核が来るのが一般的である。そこで，指定席・自由席も同様にシテーセキ・ジユーセキとなるはずであった。しかし，東京方言では，本来アクセント核が来ると予測される後ろから３拍目が長音であったために，独立性がとぼしい特殊拍がアクセント核を担いきれず，アクセント核が１モーラ分だけ前へずれている。

しかし，山口方言の老年層では長音もそのままアクセント核を担うことが可能なので，「～席」の直前にアクセント核が来たままである。ただし，若年層では傍聴席ボーチョーセキを除いて，東京方言と同様にアクセント核が１モーラ分前へずれている。その他の語彙も同じように説明できる。

若年層の紅茶コーチャは，東京方言と同様に平板型である。

２－３．促音にアクセント核が来る用例

今回の調査では，特殊拍から成る拍が高いか低いかの判断が聴覚的に難しい場合には，音声分析ソフトを使用し，視覚的に判断することにしたが，それでも促音にアクセント核が来ているかどうかは，判定が難しいところである。促音の部分は，声帯の振動を伴わないので，周波数曲線に途切れが生じるためである。

そこで，杉藤（1984）（1986）を参考に，促音の次に来る拍の，母音の声下げの始点の時間的位置，母音の下降音調の角度，促音部分の長さを観察することにした。　図２は，長門市通1930年生まれの男性の「コロッケ」の周波数曲線を観察したものである。「ロッ」の部分は高いままで平らに移行し，促音部分の途切れが短い。促音に続く「ケ」の音は，早く始まり，角度も急である。

佐久間（1929，1963復刊），奥村（1958）に言われるように，心理的生理学的要因に基づく言語音の特徴として，高い拍は長くなり，特にアクセント核の位置する音は長いということからも，促音「ッ」の部分が長く現れていることが見てとれる。

こういうことから，図２のアクセントは，「ロ」に引き続いて，「ッ」の部分まで高くそこにアクセント核が来て，「ケ」から下降していると観察した。

それに対して，図３の山口市1989年生まれの女性の「コロッケ」の周波数曲線は，促音部分の途切れが長く，「ロ」の部分に促音「ッ」へ下降する兆候が見える。「ケ」の母音の周波数曲線の始点が遅く角度も緩やかである。

同じ山口県内においても，老年層では促音の独立性が高くアクセント核を担うことができるのに対して，若年齢層ではアクセント核を担うことが困難になって，東京方言等と同様にアクセント核を1モーラ分だけ前へずらしていることが分かる。今回，同じような変化をとる語として，「四角形」があった。老年層では，「シカッケイ，シカクケイ」の型であるのに対して，若年層ではアクセント核を1モーラ分前へずらした「シカッケイ」という発音の影響なのか，促音化しない場合でも「シカクケイ」と

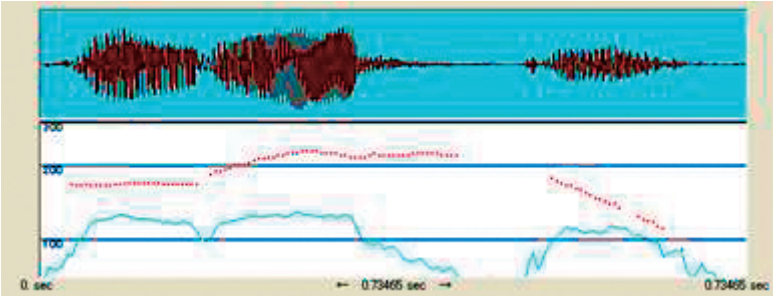

図２．「コロッケ」コロッケ（長門市通1930年生男性）

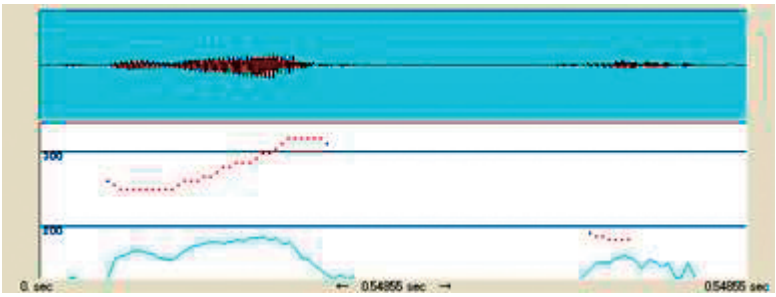

図３．「コロッケ」コロッケ（山口市1989年生女性）

発音された。アクセント辞典によれば，東京方言では，「シカクケイ」と「シカクケイ」「シカッケイ」のアクセント型があり，促音化する場合は，「シカッケイ」のみである。

	山口老年層のアクセント	山口若年層のアクセント	東京方言のアクセント
四角形	シカッケイ	シカクケイ	シカクケイ
	（シカクケイ）	（シカッケイ）	（シカクケイ）
	（シカクケイ）		（シカッケイ）
コロッケ	コロッケ	コロッケ	コロッケ
	（コロッケ）		

促音は，上野（1984）でも，「モーラ音素が核を担いうるその序列」が，その他の特殊拍に比して最も低いとされている。[6] 今回も，促音拍はアクセント核を担う用例が少なかった。

２－４．二重母音の副母音にアクセント核が来る用例

最後は，二重母音の副母音にアクセント核が来る用例である。次のような例が観察された。その年代で主に発話されるアクセント型を示し，少数の例外を（カッコ）に入れて示した。

	山口老年層のアクセント	山口若年層のアクセント	東京方言のアクセント
多い	オーイー	オーイー	オーイ
		（オーイ）	
思い	オモイ	オモイ	オモイ
経済力	ケイザイリョク	ケイザイリョク	ケイザイリョク
進水式	シンスイシキ	シンスイシキ	シンスイシキ
習い	ナライ	ナライ	ナライ
熱帯魚	ネッタイギョ	ネッタイギョ	ネッタイギョ

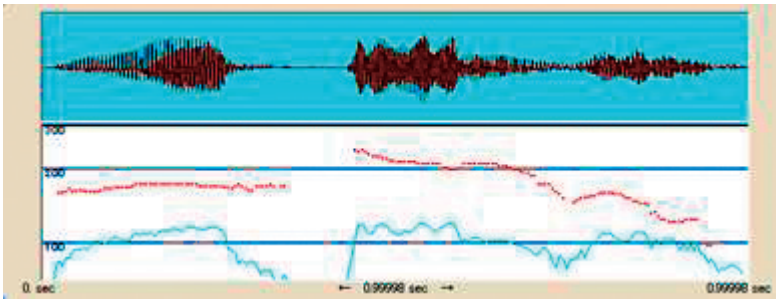

図４．「熱帯魚」ネッタイギョ（長門市通1930年生男性）

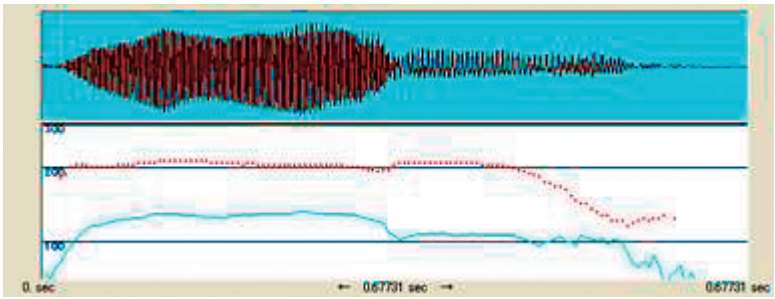

図５．「多い」オーイー（長門市通1930年生男性）

方程式　　ホーテイシキ　　ホーテイシキ　　ホーテイシキ

これも，東京方言と比較してみると，ここにあげた例では東京方言では二重母音の副母音（ここでは狭いイ）にアクセント核が来ることがなくその１モーラ前にアクセント核があるのに対して，山口方言では二重母音の副母音にあたる狭い母音イにもアクセント核が来ている。

図４は，周波数曲線が母音「イ」から急激に下降する状態をみたもの，図５は，母音「イ」のみが高い状態である。

３．おわりに

東京方言では，複合規則によって特殊拍の位置にアクセント核が来ると予測される場合でも，そこが特殊拍である場合，アクセント核が１モーラ分前へずれるという現象がある。それに対して，山口方言における特殊拍とアクセントの関係を観察したところによると，山口方言の老年層においては，特殊拍でもアクセント核を担うことが可能であることがわかった。山口方言のアクセント単位は拍である。

しかし，20歳前後の若年層になると，特殊拍にアクセント核が来ると予測される場合，東京方言と同様にアクセント核を１モーラ分前へずらすという現象が起こっていることが観察できた。

杉藤（1984）でもすでに，大阪方言の若年層において，「特殊拍にアクセントを置く発話の衰退」が報告されている。そこでも，「日本語アクセントの単位が拍であることの実証に影響を及ぼすものであり，日本語の拍とアクセントとの関係について考察する上で重要な変化」と述べられている。

特殊拍の独立性が弱まって，アクセントが音韻によって動かされるということは，古くは持っていたアクセントの標差的機能が弱まっていることのひとつの現われであると考えられる。

木部（1984）によると，北九州市小倉方言では，「特に年齢層による差が気になるところであるが，本格的な調査を行なったわけではないので，詳しい言及は避けたいが，予備調査の段階では，老年層は音節第２モーラ核の出現する割合が筆者のものに比べて低いようである。」という地域も存在する。加えて，モーラ方言とシラビーム方言の史的関係については，上野（1984）で，「モーラ単位と音節単位の前後関係を考える際には，モーラ音素に核が来なかった体系から，型の合流ないし（アクセント以外の）音変化によってモーラ音素が核を担いうる体系へ変化しうることにも留意しなければならない。」という指摘もあるので，特殊拍とアクセントの関係の先後関係については，調査語彙数，調査地点を増やしてさらに詳細な調査を行う必要がある。

注

１）　地名及び今回のテーマに関係のある部分にのみアクセントを付した。ここでのアクセント表記の方法は，高音拍をＨ，低音拍をＬで表す。以下，特殊拍の位置との対応関係を明確にするため，高音拍部にアッパーラインを引く方法も用いた。

２）　1954年（昭和29年）山口市生まれの車掌さんＡの場合を示した。なお，1954年（昭和29年）阿武郡阿東町生まれの車掌さんＢの場合は，「湯田温泉（ＬＨＨＬＬＬ），終点（ＨＬＬＬ），10時（ＨＬＬ），４分（ＨＬＬＬ）」と発音されていた。いずれも，実際の車内放送を録音し使用する許可を得て，2007年11月に調査を行った。

３）　阿武郡阿東町出身の1984年（昭和59年）生まれの女性，山口市出身の1987年（昭和62年）生まれの女性，1989年（平成元年）生まれの女性。2007年11月に調査を行った。

４）　上野（1984）には，追記として，「その後，山口県内八地点の調査を行ない，全地点が「モーラアクセント方言」であることを確認した。中でも周防大島では，モーラ音素に核がある単語を（規則的な複合語は除いても）二百語余り集めることができた。」とある。周防大島は，山口県の東の端に位置し，今回の筆者の調査地点は，ちょうど山口市を挟んで逆の西側に位置する。その

他の調査地点については具体的には書かれていない。

『新明解日本語アクセント辞典』の「音韻とアクセントとの関係の法則」p.(7)の分布図では，山口県東部は「音韻がアクセントを動かさない地方」，山口県西部は「独立性のない音韻のばあいアクセントを動かす地方」となっている。

5） 2007年3月の長門市油谷，長門市通での臨地調査は，それぞれ３名の高年層の方を対象にして行った。具体的には，長門市油谷では1920年（大正9年）生まれの男性，1933年（昭和８年）生まれの女性，1938年（昭和13年）生まれの女性の調査を行った。また，長門市通では1921年（大正10年）生まれの男性，1926年（大正15年）生まれの女性，1930年（昭和５年）生まれの男性の調査を行った。調査対象者は，その調査地点周辺でお生まれになり，言語形成期をその調査地点周辺で過ごして来られた方である。

6） 上野（1984）p.53において，「モーラ音素が核を担いうるその序列」として，「(a) 二重母音の後半モーラ（“母音連続”のうち，明らかに音節の切れ目のあるもの以外は，仮にここに含める）＞長音＞撥音＞促音」とされている。また，「あるいは撥音は長音と並ぶ位置を占めるかもしれない。」とある。

参考文献

NHK放送文化研究所編（1998）『NHK日本語発音アクセント辞典新版』日本放送出版協会

池田史子（2006）「山口県徳地方言のアクセント―名詞のアクセント体系と複合名詞のアクセント規則について―」『山口県立大学国際文化学部紀要』12，pp.11-21

池田史子（2007）「山口県における方言アクセントの世代差―３拍名詞アクセントを中心に―」『山口県立大学国際文化学部紀要』13，pp.1-6

上野善道（1984）「地方アクセント研究のために」『国文学解釈と鑑賞』49-7，pp.47-64

奥村三雄（1958）「音韻とアクセント―アクセント研究の意義―」『国語国文』27-9，pp.1-16

木部暢子（1984）「特殊拍とアクセント―北九州市小倉方言の場合―」『語文研究』58，pp.46-56

金田一春彦監修・秋永一枝編（2001）『新明解日本語アクセント辞典』三省堂

佐久間鼎（1963）『日本音聲學』風間書房，1929年に京文社刊行の復刻

杉藤美代子（1984）「大阪方言の特殊拍にアクセントを置く単語のアクセント変化」『音声学会会報』181，pp.9-12

杉藤美代子（1986）「促音，及び，長音・撥音にアクセントを置く発話の年齢による変化とその音響的特徴」『国語学』147，pp-106-92

柳田征司（1995）「モーラ方言アクセント（京阪式アクセント）・シラビーム性モーラ方言アクセント（東京式アクセント）・シラビーム方言アクセントの分離は，いつ，どのようにして，なぜ生じたか」『愛媛大学教育学部紀要　人文・社会科学』27-2，pp.13-78

音声分析ソフト

今石元久編（2005）『音声研究入門』和泉書院，付属CD-ROM「音声録聞見（フリー版）」

謝辞

このたびの調査にあたり，上野洋子さん，岡村徹さん，長谷川倭子さん（以上，長門市油谷），磯部正志さん，磯谷忠一さん，安森良子さん（以上，長門市通），柴崎春佳さん（阿武郡阿東町），白坂実佳子さん，田村紗穂理さん（以上，山口市）に話者としてご協力いただきました。また，長門市油谷公民館，長門市通公民館，長門市くじら資料館の皆様にも大変お世話になりました。本学の武市眞弘先生も長門市での調査にご同行くださいました。

そして，ＪＲ山口線の車掌さんお二人にも車内放送のアクセントを録音・観察する許可をいただきました。

ここに記して，皆様に深謝申し上げます。

（日本語学）

The Relation between Special Mora and Accent Nucleus in Yamaguchi Dialect

IKEDA Fumiko
(Japanese linguistics)

In the standard Japanese, which is based on the Tokyo dialect, it is found that the mora that consists of /R/, /N/, and /Q/ or the latter half of a diphthong is not an accent nucleus. The position of the accent nucleus is simply moved to the left.

On the other hand, in the traditional Yamaguchi dialect among the elder people in the area, it is observed that the special mora function as an accent nucleus.

However, this tendency is scarcely observed among the young people in the area. They seem to move one mora to the left, in the same manner as the standard Japanese language.